# JIC インフォメーション

第 189 号 2016 年 10 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所：JIC 国際親善交流センター　発行責任者：伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス：〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL：03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪・ロシア留学デスク：〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号　TEL：06-6944-2341


はりねずみのジェーニャ

ロシア・旧ソ連 国際交流誌

世界文化遺産・ソロヴェツキー修道院の全景（1992 年ユネスコ登録）

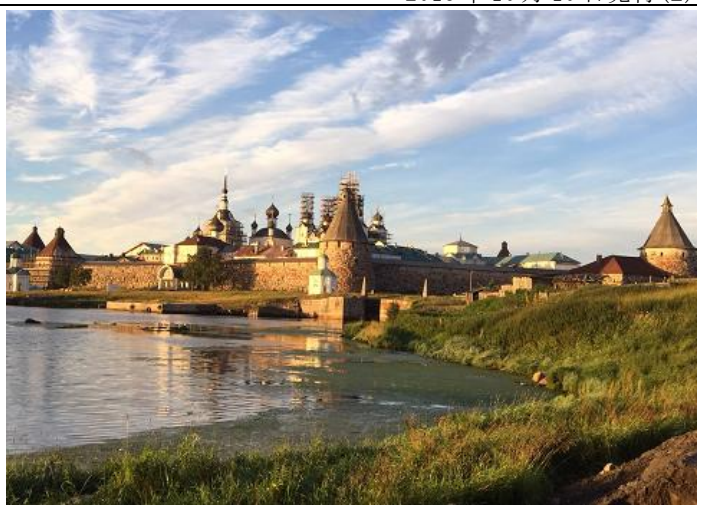

《特集》 ロシアの世界文化遺産(4)
「聖地、鎮魂の島々」ソロヴェツキー諸島・・・・・・・・・・・・2P
《スタッフ旅行記》
ソロヴェツキー、人を変えてしまう島・・・ﾓﾛｿﾞﾌ･ﾃﾞﾆｽ・・4P
ロシアからモンゴルへ 再訪・・・・金井義彦・・・・・・・・・・・・8P
ロシア文化フェスティバル 2016 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9P
【3 年目に入った日ロ創幸会】
お互いをもっと知ろうよ！・・・江藤幸作・・・・・・・・・10P
映画「レミニセンティア」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12P
本の紹介「ウラジオストク居留民の歴史」・・・・・・13P
ロシア文化サロン・・・高野史緒さんの講演・・・・・・・14P
ロシア生活不思議体験「買い物」・・白井秀治・・・・15P



JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ロシアの世界文化遺産・第 4 回目は、ロシア正教の聖地・ソロヴェツキー諸島を紹介します。ロシア北西部、スカンジナビア半島の東のつけ根に突き出たコラ半島とカレリア地方に囲まれた白海。冬は凍結するこの北の海に浮かぶ 6 つの島がソロヴェツキー諸島（ロシアではソロフキ Solovki と略称で呼ばれます）です。

15 世紀後半に設立されたソロヴェツキー修道院は、ロシアの『北の最前線』を担う要塞であり、同時にロシア正教の一大聖地でした。ソ連時代には「強制収容所」の島として知られ、ロシアにとっては『負の遺産』でもあります。



## 《特集》ロシアの世界遺産(4)

# 「聖地、鎮魂の島々」ソロヴェツキー諸島

### ソロヴェツキー諸島の文化的歴史的遺産群

登録；1992 年　アルハンゲリスク州、ソロヴェツキー区
Cultural and Historic Ensemble of the Solovetsky Islands

ソロヴェツキー修道院は、15 世紀前半にこの島に移り住んだゲルマン（German）とサワティ（Savvatiy）の 2 人の修道士によって設立されました。その後 100 年余りの間に修道院はこの地の最も豊かな地主となり、ロシア正教の重要な聖地となりました。ロシアの初代ツアーリとなったイワン雷帝（イワン 4 世／在位 1547 年～84 年）の時代に、ソロフキの修道院長となったフィリップ 2 世（後のモスクワ府主教、イワン雷帝の暴政を諫めて殺害された）によって、現在に残る強大な石積みの城壁が築かれ、内部に重要な建造物が作られました。

#### ソロフキのクレムリ（城塞）

「ソロフキのクレムリ（城塞）」と呼ばれる修道院は、7 つの門と 8 つの塔を持つ城壁に囲まれています。城壁は高さ 8～11 メートル、厚さ4～6 メートルの巨大な壁で、ロシアの北の国境に面した要塞を兼ねていました。内部には、ウスペンスキー大聖堂（1557 年）、プレオブラジェンスキー大聖堂（1566 年）、ブラゴベシェンスキー大聖堂（1601 年）、水車小屋（17 世紀初頭）、鐘楼（1777 年）、ニコライ聖堂（1834 年）などの建造物が並び、それらが屋根付きの湾曲した通路で連絡され、周辺には修道士や召使、職人たちの居住区がつながっていました。

ロシアの帝政時代を通じて修道院は強固な要塞として知られ、16 世紀後半のリヴォニア戦争（バルト地域をめぐるポーランド・スェーデンとの戦争）や 19 世紀のクリミア戦争（トルコとこれを支援する英仏との戦争）でも外敵を退けて勇名を馳せました。また、17 世紀後半のニーコン総主教によるロシア正教の改革では、古い儀式を堅持する古儀式派を支持し、ソロヴェツキー修道院の人々はツアーリ軍に対して 8 年間にわたる頑強な抵抗を続けました（「ソロヴェツキー修道院の反乱」）。

#### 先進技術、産業拠点としての修道院

修道院は、キリスト教において、修道士がイエス・キリストの教えにならい、祈りと労働をともにする共同生活の場です。中世以来の修道院では自給自足の生活を行い、農業から大工仕事、医療などすべてを修道院の一員が手分けして行っていました。そこから原野や森林の開拓、農業技術の革新、農産物加工技術（ビールやワイン、薬草酒の醸造）などが発展していきました。医療、病院のルーツも修道院にあると言われています。ホスピス（Hospice）は終末期ケア施設のことですが、元々は中世ヨーロッパで旅の巡礼者を宿泊させた教会をホスピスと呼んでいました。教会や

修道院が病人の手当をし、旅人を宿泊させ巡礼者を歓待した歴史が、歓待する(Hospitality)、病院(Hospital)といった言葉の語源となりました。

ソロヴェツキー修道院もまた大地主であると同時に、この地の産業拠点でした。その収入源は製塩(1660 年代に 54 か所の製塩所を所有していた)、漁業(昆布や魚などの漁獲と販売)、雲母の加工、鉄工業などであったと言われています。

## ロシア最初の海への出口、アルハンゲリスク

白海に流入する北ドヴィナ川のほとりにはアルハンゲリスクの町があります。アルハンゲリスクは、1584 年に開港した港町です。冬季の 5 か月間は凍結して使えなくなるものの、当時のロシア唯一の海港として、イギリスやオランダとの貿易で栄えました。この時代、バルト海とスカンジナビア半島はスェーデン王国が支配しており、白海に面したアルハンゲリスクはロシアのヨーロッパへの窓口であり、ソロヴェツキー修道院はその白海防衛の最前線基地だったのです。

ドヴィナ川岸に立つ開港記念碑

ピョートル大帝がスェーデンとの戦争に勝利してバルト海に進出し、1703 年にサンクトペテルブルグの町を建設するまで、アルハンゲリスクはロシア唯一の対外貿易港でした。海軍の増強を重視したピョートル大帝によってアルハンゲリスクに造船所が作られ、町はその後も帝政期を通じて北欧の魚介類の輸入やロシアの木材の輸出など、重要な貿易港として発展をつづけました。

## 強制収容所

ロシア革命の後、宗教を否定した社会主義政権によってソロヴェツキー修道院は閉鎖され、レーニンの命令によって 1923 年にソ連最初の強制収容所(略称 SLON/ロシア語ではГУЛАГグラグまたはЛагерьラーゲリ)がこの地に開設されました。当初は革命政権に反対した政治犯や宗教者が収容されたわけですが、その規模と範囲はスターリン時代に急拡大し、ソ連全土に強制収容所網が広がっていきました。

この地にソ連最初の強制収容所が開設されたのにはそれなりの理由があります。本土から海で隔てられた僻地であるため、ソロヴェツキー諸島は帝政時代を通じて犯罪者や政治犯、宗教的異端者の流刑地として利用されていたのです。修道院はロシア正教の布教拠点であると同時に、ツアーリ専制政治への反対者や正教教義への異端者の「監獄」でもありました。

ソロフキの収容所そのものは 1939 年に閉鎖されたものの、ソ連時代を通じてソロフキは強制収容所(ラーゲリ)の代名詞となりました。その残酷な実態はソルジェニ―ツインの小説「収容所群島」につぶさに描かれています。囚人たちはソロフキで道路やバラックの建設、森林伐採、泥炭の採掘、レンガ作りなどの労働に酷使されました。1923 年から 39 年の間に、ソロフキのラーゲリには約 8 万人が収容され、その半数が生きて出ることができなかったと言われています。

## 古代の石の遺跡

白海に浮かぶソロヴェツキー諸島は、太古の時代から人々にとって簡単に立ち入ることのできない聖域でした。ロシア人がこの島に住み着くはるか以前にこの島を訪れ、あるいは住んでいた人々は、フィンランド系の北方民族と考えられています。彼らは、この島のあちこちに巨大な迷路(ストーンサークル)を作り、自然崇拝の儀式を行っていたようです(ストーンサークルの制作時期は不明ですが、紀元前 6～4 世紀ではないかと推定されています)。

ソロフキと対岸のケミとのほぼ中間にあるクゾフ島は花崗岩質の岩で覆われた無人島ですが、その岩山には古代人が一定の法則に基づいて並べたと思われる石積みが多数散在しています。これらも自然崇拝時代の貴重な遺跡として研究者の注目を集めています。

## 現在のソロフキと観光情報

ソロヴェツキー諸島は、1974 年に「歴史・建築博物館と自然保護区」に指定され、1992 年に「中世の宗教コミュニティの信仰・不屈・進取性を表わす北部ヨーロッパの荒涼たる環境における修道施設の傑出した例」として、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。

宗教が禁止されていたソ連時代末期までソロヴェツキー

修道院は宗教施設ではなく博物館として扱われていました。ソ連崩壊後、1990 年代から宗教活動が再開され、修道士たちが正教徒としての生活を復興し、同時に修道院の補修・補強作業が続けられています。

ソロフキには、対岸のケミから船（約 2 時間）で、またはアルハンゲリスクから飛行機（約 40 分）で行くことができます。観光シーズンは 7 月～8 月ですが、天候によっては飛行機が飛ばないこともあります。

今ではロシア北部における代表的な観光地の一つとなっているソロヴェツキー諸島ですが、島内のインフラはまだ整備途上です。ホテルが非常に少ないこと、道路の大半が未舗装であることが、観光発展のネックとなっています。したがって、島内では民宿と徒歩またはレンタサイクルでの島内めぐりが一般的です。また、アンゼル島やボリショイ・ザヤツキー島、クゾフ島へはガイド付き現地ツアーでしか行くことができません。

参考までに、島内では以下のようなガイド付き現地ツアーが催行されています。

●ソロフキ諸島の歴史～ボリショイ・ソロヴェツキー島内徒歩ツアー（3 時間）／ソロフキ村の中心部からスタート、森林の道を歩き、古代迷路のある岬を経由して、修道院墓地、石碑、修道院の外壁などを訪ねる徒歩ツアー。

●ソロヴェツキー・クレムリン～徒歩ツアー（3 時間）／ソロヴェツキー修道院内部の聖堂、城壁内の教会や塔、水車小屋などを見学する。

●ボリショイ・ソロヴェツキー島内巡り～徒歩またはバス・ツアー（4～5 時間）／修道士たちが築いた石積みの堰（フィリポフ岩）、セキルナヤ山（標高 96m）の灯台教会、収容所の犠牲者埋葬場所、植物園などを回るツアー。

●ベルーガ（大チョウザメ）の岬～バスと徒歩ツアー（6 時間）／ボリショイ・ソロヴェツキー島の西端「ベルーガ岬」は、大昔から大チョウザメが集まる場所として知られる。夏場（7 月～8 月）の一時期、一日 2 回の引き潮の時間に海が無風の時、大チョウザメたちは泳ぎながら歌を歌う。

●ボリショイ・ザヤツキー島～船と徒歩ツアー（4 時間）／謎のストーンサークルが多数あり、自然の宝庫でもある島に船で渡り、徒歩で古代遺跡や修道遺跡を巡る。

●アンゼル島・隠遁者たちの世界～船と徒歩ツアー（6 時間）／アンゼル島は修道士たちが修行のために粗末な小屋を建てて住んだ島。船で島に渡り、その跡を訪ねる徒歩ツアー

●クゾフ諸島・古代人の世界～船と徒歩ツアー（7 時間）／船でクゾフ島へ。白海で最も標高の高い岩山（標高 126m）に登り、自然崇拝時代の石の遺跡を巡るツアー。

## 《旅行記》ソロヴェツキー諸島

# 人を変えてしまう島

### 【第 1 回】ソロヴェツキーへの遠い道のり

モロゾフ デニス（JIC 東京）

ソロヴェツキー諸島への旅については昨年から話が持ち上がっていた。わが社の取引先「バルバルカ・トラベル」のリュドミーラ社長からの誘いで、JIC から私と伏田社長が行くことになった。リュドミーラ社長とは、長年にわたり様々な霊地を一緒に巡礼をしてきた。そのうち最も記憶に残っているのは四国 88 か所の歩き旅だ。そして新たな「パワースポット」求めて、今回はロシアの北の果てにある諸島を訪れる運びとなった。

リュドミーラさんから送られてきたプログラムは ALEXANDER GALICH 氏の詩で始まっていた。
直訳すると、このようになる。

ある島の話をよく聞く
その海辺には忘却の花が咲く
プライドを忘れよう
悲しみを忘れよう
病気を忘れよう
卑劣さを忘れよう
そんな島だとさ

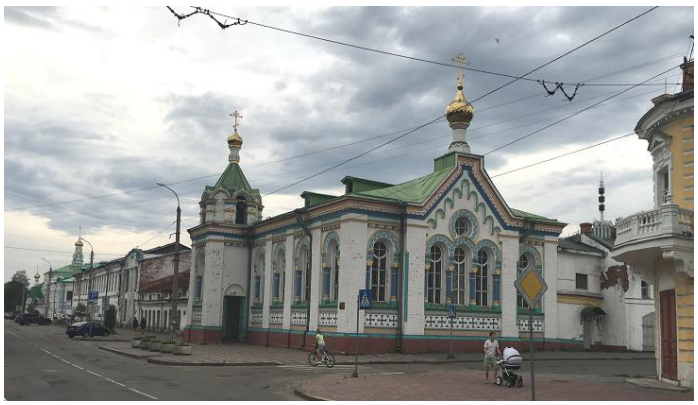
この詩を読み、何だかとんでもなく素敵で、神秘的な場所を想像してしまったのは、この私。

ロシア正教の偉大な修行僧が開拓した島。自然の宝庫で白鯨にも出会える島。古代のストーン・サークルが点在する島。そんな魔法のような島に出会えると信じ、私は 7 月 16 日にモスクワ行きの飛行機に乗った。

ソロヴェツキーはロシア人の私にとっても簡単に行ける所ではないので、目一杯この島を感じようと、実はあえて事前知識を仕入れてこなかった。インターネットでは様々な情報が溢れているが、それを読むと既成概念に囚われてしまうので感動が半減すると考えたからである。

#### 初日　ソロベツキー島に拒否される一行

折しもモスクワでは「ジャムの日」のイベントが開かれていた。あちらこちらに設置された花のアーケードで飾られたモスクワ中心部を早朝に離れ、シェレメチボ空港に向かった私たちをゲリラ豪雨が見舞った。明るかった空が突然真っ暗になり、雷光とともに大粒の雨が降り



アルハンゲリスクの古い街並み

だした。なんとなく嫌な予兆。天はまるで「ソロヴェツキー島に簡単に行けると思うなよ」とでも言うようだ。

空港でサプライズ登場したのはスイス在住のアンドレイさん。彼もまた私たちと一緒に聖地巡礼の旅をともにしてきた爽やかで愉快な仲間。直前になってようやく時間の工面ができたようで、急遽ソロヴェツキー島行きに参加することになった。

実は、他にも沢山の人がこの旅行に参加する予定らしい。バルバルカ・トラベルのスタッフとその家族、長年バルバルカとつきあっている古株のお客たち、総勢 20 名にもなる。グループの半分はすでに寝台列車でモスクワからケミ市に移動しており、そこから船でソロヴェツキー島に渡ることになっている。それに対して私たちは空からのアプローチを選択。モスクワからアルハンゲリスク市まで国内便で飛び、さらにソロヴェツキー島行きの飛行機に乗り換える手はずになっていた。

## アルハンゲリスクのソ連式レストラン

ロシア産スーパー・ジェット「SUKHOI」は非常に快適で、2 時間弱で雨模様のモスクワから日差したっぷりのアルハンゲリスクまで連れて行ってくれた。空港は想像していたよりも小じんまりしており、到着ロビーと

システムも価格も
ソ連的な食堂

食堂「AVIATOR」の風景

出発ロビーは同じ 1 階にあった。私たちは荷物を受け取り、早々に外に出た。乗換便のチェックインまではまだ 1 時間以上あり、どこで時間をつぶそうかと思案していたところ、「愉快な仲間」アンドレイさんが早速周辺を歩き回り、「すごいところを見つけたぞ！みんなで行こう！」と声をかけた。彼の案内で入ったのは食堂「AVIATOR」。

薄暗い店内には私が子供のころによく見た風景が広がっていた。鉄製ラックのお盆には無造作にパン、フォーク、スプーンが放り込まれている。その先にはソ連時代から何一つ変わらない格好のぽっちゃりおばさんが佇んでいた。メニューは決して豊富ではなく、スープ、カツレツ、ロシアン・ハンバーグと付き合わせのポテト、ジュース、ピロシキ。しかし、驚くべきはその価格設定。これもソ連時代から変わってないのではないかと思うほど、激安の料金だった（いや、最近のルーブル安の恩恵か）。

わがグループの参加者たちはまるで子供のようにはしゃぎ、誰しも 30～40 年前のソ連時代にタイムスリップしたかのようだった。注文した料理を肴に持ち込みのウォッカで乾杯を繰り返し、1 時間はあっという間に終わりを迎えた。

## 飛行機界の恐竜

再チェックインした後、待合室で搭乗案内を待つ。しかし、出発時間はとっくに過ぎたのに案内が流れない。約 2 時間後、ようやく連絡バスに乗り込み、飛行場の端の駐機場へ出発。バスが止まったのは小さなプロペラ機の前だった。機体の色こそ格好良く 2 色で決まっていたが、機材はどう考えても相当な「年代物」。スマホで調べてみると、飛行機はアントノフ 24 型（AN-24）で、ソ連時代には「アエロフロートの声」という異名で親しまれていた小型機だった。胴体に書かれた番号を確認したところ、この飛行機はなんとすでに 38 年も使用されており、書類に間違いがなければ、あと 7 年間使われる予定だそうだ。

この飛行機界の恐竜を写真に収めようと皆が一斉にカメラやスマホを構え出した瞬間、整備トラックに乗っていた運転手が形相を変えて飛んできた。「やめろ！撮った写真はただちに消去しなさい！」と、まるで警備隊のような態度。わけを聞くと、彼はとんでもない理由を並べ始めた。

「あんたらのスマホやカメラは衛星を通じて ISIS に監視されているんだ！テロリストの協力者になりたいのか？こんな世の中だから、ちゃんと気をつけろよ！」

「・・・・・」

私は絶句し、何も言えなかった。このドライバーは何の根拠があってこんなことを言っているのか。私に聞かないでほしい。私にも分からないから。ロシアの北の果てにある小さな飛行場と、いつ落ちてもおかしくないおんぼろ飛行機を、イスラム国はどんな理由で、そしてど

のような仕組みで私たちのカメラを通じて監視しているのか。私にはまったく理解できなかった。

それでは、「テロリストの協力者」が隠し撮りしたロシアの「秘密兵器」をご覧ください。ただし、見終わったら、このページを直ちに焼却してね。ISIS はどこに潜んでいるか分かりませんからね！（笑）

ソ連製のリーサル・ウェーポン

薄暗い機内に一人、また一人と、ゆっくり乗り込んで行く。なぜなら、梯子はもろく、二人同時に乗ると壊れる危険性があるからだ。席に収まり、周りを見渡す。座席数 50 弱の小さな飛行機だ。不安がこみ上げてくる。この飛行機、本当に大丈夫かな。ギシギシときしむ床を勢いよく歩いてきた機長がコックピットの扉を開け、中へと消えていった。一瞬見えたコックピットの様子（荷物が無造作に置かれ、まるでゴミ屋敷のように散らかっている）に、私の不安はさらに募る。窓から外を見ると、先ほどの整備トラックのドライバーが巻きホースを取りだし、何故か始動した左のエンジンに水をかけ始めた。水はプロペラでどんどん弾き飛ばされ、窓にぶつかっていく。外の様子が見えなくなるほどだ。

しばらくすると、右エンジンも始動し、飛行機はゆっくりと走り始めた。滑走路まで出たが、しかし飛ぶことなく、やがて元の位置に戻って停止。空調が効かない機中で、搭乗者一同大汗をかきながら頭を傾げた。どうしたのだろうか。するとコックピットから機長が現れ、「みんな、ごめんね！さようなら！」と笑顔で言い残し、足早に外へ消えて行った。

さらに何分かたち、飛行機を出るように指示され、搭乗者たちは再びむさ苦しいバスに乗り込んで、空港ビルに戻った。さっきは何だったのか？今日は出発できるのか？空港スタッフに聞いても邪魔者扱いされ、ろくな説明をしてくれない。1 時間ほど経過すると、航空会社スタッフと思われる男女が 1 階の待合室に現れた。女性は 1.5 リットルのペットボトル 2 本と 10 個程度の紙コップをベンチ角の荷物台にそっと乗せて、速やかに去っていった。男性はそのペットボトルを悲しい眼差しでしばらく見つめた後、壁に向かってぼそっと呟く。「水だよ。飲んでね」。そしてなぜか大きなため息をついた後、彼もさっさと事務所の奥に消えていった。

搭乗者は 30 人を超えていて、しかも 1 階と 2 階に分かれて、バラバラに散らばっていた。飲料水の案内を聴き分けられたのは直径 1 メートル内にいた数名の乗客だけだった。彼らは水を飲み、そして時はさらに流れて行った。ある意味で「神対応」のような風景を目の当たりにした私ですら「さすがはオソロシア」だと思った。

しばらくすると、さすがに太いはずのロシア人の我慢の糸も切れてしまい、何名かが航空会社の事務所になだれ込んだ。結果、「技術的な問題があり、ただ今対応している」という説明がやっとあり、昼食券が配られた。この食券を利用できるのは、空港ビル向かい側にあるホテルのレストランのみなので、乗客はさっそくそこへ向かった。「レストラン」は、今朝ほどたむろした食堂「AVIATOR」とさほど変わらない雰囲気だが、料金だけは立派な「ホテル・レストラン」並みだった。食券をよく見ると、利用限度額は 120 ルーブル。およそ 200 円である。買えたのは、バターと少量のイクラが乗っているパン 1 枚とカップ・ジュース 1 個。

私たちのチームはもちろんそんなもので我慢できるはずもなく、大量のつまみを購入し、そしてまたしてもウォッカを 1～2 本を空けた。

↑待ち時間は続く、宴会も続く

120 ルーブルの食券↓

**今日は飛びません！**

時間がきて、空港ビルに戻ってしばらく待ったが、アナウンスは何もない。やがて「今日は飛ばない」という噂が流れ始め、乗客はまたして航空会社の事務所に押しかける。噂は本当だった。出発は翌朝 8 時に変更され、乗客はアルハンゲリスクで一夜を過ごすことになった。

昼食を摂った「レストラン」が入っているホテルが今夜の宿に指定された。ところが、航空会社の女性スタッフは名簿で日本人の名前を見つけると、「この人はダメ。

あそこでは泊れない」と言い出した。私たちは何とかしてくれと頼んでみたが、やはりダメ。理由は、航空会社の規定により、外国籍の乗客はアルハンゲリスク中心部のホテルを手配しなければならないのだそうだ。リュドミーラさんは「彼は通訳と一緒でないとダメだ」と押し切り、私と伏田はもう一人の外国人乗客（ポーランド人）と一緒に、町の中心部に移動することになった。正直なところ、外国人を泊められないホテルとは一体どんな代物か非常に興味があったが、願いは叶わず。

スタッフが手配したミニバンはロシア特有の手違いや勘違いの末、40 分後にようやく現れた。中心部までおよそ 20 分、大型シティホテルの前で降ろされた。ホテルの名前は「DVINA」。アルハンゲリスクはドヴィナ川の河口に広がる港町だが、ホテル名はその川に因んだようだ。入口では看板とともに三つの星が輝いていた。フロントの対応は星の数に相応しく丁寧で、部屋も清潔。エアコンなどはないが、基本的な備品は揃っていて特に不自由を感じることはなかった。

窓を開けてみると、道路の向こう側に商業ビルがあった。ビル名は「センター」。そしてテナントで入っているレストランは「トーキョー」（東京）という名前だった。この二つの言葉をロシア語で続けて読むと「セントラル・トーキョー」になるわけだ（笑）。

## アルハンゲリスクの街を歩く

1 時間もしないうちに、わがグループのメンバーがホテルのロビーに現れた。せっかくの機会なので外国人に見せられないほどのホテルで時を過ごすよりも、アルハンゲリスクの中心部を散策しようということで、わざわざタクシーでやってきた。

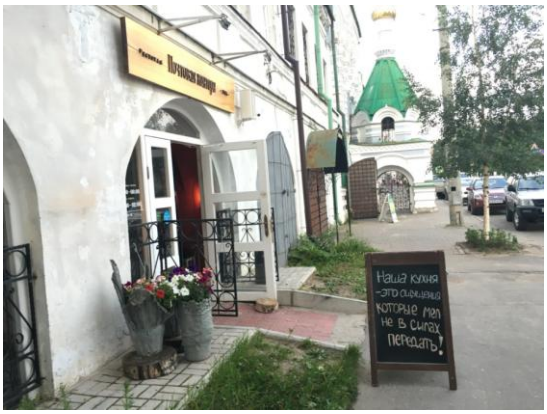
白夜の季節はまだ終わっておらず、夜 8 時を過ぎても外は昼間のように明るかった。あちらこちらに 19 世紀の建物が点在していて、歩いていて楽しい。そしてドヴィナ川のプロムナードに出ると視界が一気に開ける。ここはどうやら市民の最もポピュラーな憩いの場になっているようだ。スケート・ボードやスポーツ・バイク用のアスレチックがあったり、ベンチが設置されていたり、非常に気持ちのいい空間だった。

## レストラン「郵便局」

夕食は、リュドミーラさんがホテルのフロントで調べたユニークなレストラン「POCHTOVAYA KONTORA」（郵便局）で取る事になった。帝政時代（1786 年）に建てられた郵便局ビルは大掛かりな修復を終えて、市内随一の人気レストランに変貌。雰囲気よし。サービスよし。そして味もよし！このような所でこんな素敵な店に出会えるとは、思ってもいなかった。

私と伏田は時差ボケがまだ治らず、22 時前にホテルにもどってベッドに入ったが、ロシアの友人たちは深夜過まで食事を楽しんだそうだ。

ホテルのカーテンは遮光性がほとんどなく、白夜の光は部屋中を照らしていた。そしてホテル前広場の国旗用の棒にとりつけられていた鉄リングが一晩中淋しげにカチャンカチャンと音を立てていた。（2 日目に続く）




入り口の黒板には「我々が作る料理はチョークで伝えられないほどの感動につつまれている」と書かれていた。

左、帝政時代に発案された「オリビエ・サラダ」
右、ガスパッチョ。めちゃめちゃ美味しかった

レストランの内部もいい雰囲気

《旅行記》 ～その４（最終回）～

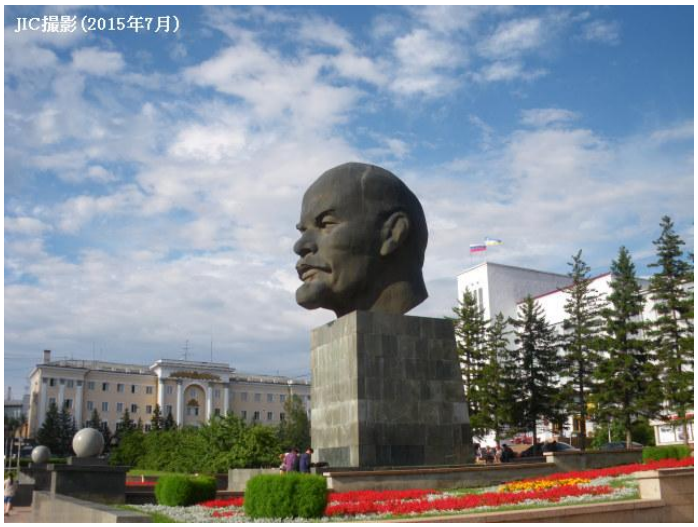
# ロシアからモンゴル、再び訪れる

2015 年7月 31 日　ウラン・ウデ

金井義彦（JIC 東京）

停泊したクルーズ船の中。キャビンの相棒は船内をうろうろしているのだろうか。あるいはまだ川岸にいて石柱を間近に見ているだろうか。レナ川クルーズのキャビンで石柱群を見ながらペンを動かさなければいけないのは、1 か月ほど前に訪れたブリヤート、ウラン・ウデのレポートのため。キャビン内に入り込んだ蚊を粗方やっつけ、やっと仕事に取り掛かれる。船内ラジオ放送から流れるロシアンポップス。この空間と雰囲気はシベリア鉄道のコンパートメントと同じだ。机にノートを置いてペンを動かす。

イルクーツクからひと晩乗った列車は定刻より少し早くウラン・ウデの駅に着いた。「ウラン・ウデ」。言葉の響きは耳に心地好い。「ウラン」はモンゴルの「ウラン・バートル」で遣われているのと同じで「赤い（美しい）」という意味。「ウデ」は街を流れる「ウデ川」。このブリヤート語はロシア語の場合だと「ウダ川」となるので、いつか「宇多川さん」「宇田川さん」などを集めた「ウダガワさんウダ川ツアー」を企画したいと思う。ロシアのチタと愛知県知多市は姉妹都市。名前が同じ、は楽しい。




早朝に列車が到着したのですぐに観光というわけにはいかず、少しホテルでひと休みする事にしたのだが気持ちははやり、荷解きもほどほどに街へ出た。とにかくレーニンの頭、レーニンの巨大な頭を見たいのだ。ウラン・ウデのシンボルとも言えるレーニン頭部像は圧倒的なインパクトを持っている。ギネスブックに載る世界最大の頭の像だ。こういった「巨大な像」「変わった像」を見るのはロシアを旅する楽しみのひとつである。この像を見るためだけにウラン・ウデに来てもよかったほどなので、嬉しすぎていろいろな角度から何枚も何枚も同じような写真を撮りまくってしまった。

夜行列車で起きてから何も食べないまま「頭」に引き寄せられてしまったので流石にお腹が空いてきた。朝食を摂ることにし、ソヴィエト広場近くに小洒落たカフェがあったのでカプチーノとロシア風パンケーキを注文。味も、適度な量にも満足して市内観光を続ける。

みなさんもご存知、ウラン・ウデのオペラ・バレエ劇場の芸術監督は岩田守弘さんという日本人。ウラン・ウデで最も有名な日本人だろう。日本人抑留者が建てたこの劇場の前には噴水があって、ちょっとした市民憩いの広場になっている。そこでは夏の時期、毎週土曜の夜に無料の野外コンサートが行われているそうだ。噴水は周辺に設置されたスピーカーから流れるメロディと調和して、気持ちを軽やかにさせる。そのままレーニン通りを進むと歩行者天国になり『ブリヤートのアルバート通り』と呼ばれる目抜き通りへ。そこにも噴水があり音楽が流れ、花が咲いている。ハチミツ売りが並んだりクワス売りがいたりカフェがあったり。そこには「レーニン頭部像のウラン・ウデ」というイメージからはほど遠い、美しい夏のロシアの軽やかな街の姿があったのだ。ウラン・ウデはそんな一面も見せてくれた。そして、街は小さいながらも「ブリヤート自然博物館」「ブリヤート歴史博物館」「町の博物館」、少し離れた所に「ザバイカル民俗学博物館」と、いくつかの面白い博物館を持っている。特にロシア語がわからなくても楽しめると思ったのはブリヤートのアルバート通り、町の博物館。ひと昔前のロシアの家庭におじゃまするような感じで、カレンダーや雑誌、絵本が置いてあったり、ブリヤート衣装などのコスプレで写真を撮影したりできる。楽しい。メインストリートの終わり、南の端にはウラン・ウデ最大の教会、青い色と白い色が美しいアヂギートリエフスキー聖堂。近くには政治弾圧の犠牲者たちの碑が建ち、その周辺からスモーリナ通りへ足を延ばすと、独特な窓のある古い木造の家を見ることができる。木造家屋と木造家屋の間に火災に備えた石

の壁があったりして、自動車やジーパンTシャツ姿の若者を見かけなければ、いったい今はいつの時代に来てしまったのだろうと思う。通りは静かだ。

レーニン頭の次に気になるのはイヴォルギンスキー・ダツァンというロシアでのチベット仏教の中心地である。街から車で 40 分。寺院のあるイヴォルガ村を目指す道の途中、遠くの山に、サンスクリット語やチベット語ではなくロシア語の文字で「オムマニペメフム」と書かれているのが見える。寺院に到着するとレーニンや劇場、教会の景色の記憶は吹き飛ぶ。マニ車、タルチョ、ストゥーパ。全く違う世界。ここはロシアだ。ここはロシアか？と思いながら景色を見ている。目に入る度にマニ車を手で回す。大きいのやら小さいのやらをぐるぐる回す。敷地内にあるゲルに入って昼食。テーブルに並ぶのは「シューレン（麺）」「ブーズィ（小さい肉まん）」「バター茶」。料理からの強烈なヒツジ臭。モンゴルで食べた物とほぼ同じだ。ゲル内でこのブリヤート料理。ここはロシアだということはもう忘れている。

いろいろな色を持つウラン・ウデにはどんな人がいるのか。通りを歩く人々の中には日本人と似た顔も見かける。案内してくれたガイドのトゥヤーナさん。英語を話すロシア人女性なのだが容姿は日本人にとても似ている。今回の旅で訪れた 3 都市、ウラジオストク、イルクーツク、ウランバートルはいずれも再訪、ウラジオストクへは何度目かだが、ウラン・ウデには初めて来た。けれども旅行記タイトル「再び訪れる。」に含めてしまった理由はここにあって、そんな日本人に似た人たちに会った時の気持ちから。トゥヤーナさんと並んで街を歩いて話をしていると、昔からよく知っている人と一緒に日本から旅をしているんだという気になってくる。

一泊でウラン・ウデを離れる。この街へ、今度は本当の「再訪」をすることがあるだろうか、などと感傷に浸っている間もなく、鉄道駅から列車に乗り込む。ロシア～モンゴルの国境を越えてウランバートルを目指すのだ。コンパートメントの同居人はアイルランド MR、オランダ MS、イギリス MR、それぞれ単身のバックパッカーたち。あぁ、そうだ。この空間にもまた来てしまった。再訪どころか、いったい何度目になるのか「夜行列車」という空間。列車は動き出し、楽しい旅話の時間が始まる。（了）

## JIC ロシアセミナー

今年も JIC ロシアセミナーを開催します。12 月のプーチン大統領訪日を控え、下斗米伸夫先生に、「プーチン訪日と日ロ交渉の行方」と題してホットなテーマで講演していただきます。併せて、ロシア留学「説明・相談会」を開催します。

**講演；プーチン訪日と日ロ交渉の行方**
**講師；下斗米伸夫先生**（法政大学教授）
**日時；16 年 11 月 19 日（土）13:30～17:00**
**講演会；13:30～15:00**
**ロシア留学相談会；15:15～17:00**
**会場；新宿オークタワー1F 会議室**
（地下鉄丸ノ内線「西新宿」徒歩 2 分）
**参加費；無料**
**申込・問合先；TEL 03-3355-7294**
e-mail= jictokyo@jic-web.co.jp
**主催；ＪＩＣ国際親善交流センター**

## ロシア文化フェスティバル 2016 IN JAPAN

＊文化の秋にふさわしく、多彩なプログラムが予定されています。

**アレクサンドル・ソクーロフ監督最新作**
**「フランコフォニア　ルーヴルの記憶」上映**
10 月 29 日（土）渋谷・ユーロスペースほかにて順次ロードショー!!!　詳細↓
http://eurospace.co.jp/works/

**ブリヤート共和国「ナムガル」コンサート（口琴・喉歌）**
11 月 2 日（水）　19:00 開場、19:30 開演
会場；月見ル君想フ（東京・南青山）
11 月 3 日（祝）16:00 開演
会場：武蔵野スイングホール
11 月 4 日（金）　19:00 開演
会場：音楽工房ホール（静岡県浜松市）
11 月 7 日（月）18:30 開演
会場：広島県民文化センター

**日本とロシア―文学と音楽の世界**
11 月 26 日（土）東京・ルーテル市谷ホール

**クリスマス/アヴェ・マリア　ペテルブルグ室内合奏団**
12 月 8 日（木）～25 日（日）、東京・日野市、埼玉・所沢市、志木市、大阪市、広島・廿日市市、京都市、東京（オペラシティ、東京文化会館）、八王子市、横浜市、千葉市など各地で開催！詳細は光瀧社まで↓
http://www.koransha.com/orch_chamber/avemaria2016/

【頑張る交流団体】3年目に入った日ロ創幸会

# お互いをもっと知ろうよ！日本とロシア

## ～今年もロシアに視察団～

江藤　幸作（日ロ創幸会・代表理事）

エカテリーナ宮殿の前にて（サンクトペテルブルグ）

私たち「NPO（特定非営利活動）法人・日ロ創幸会」は2014 年 4 月 2 日、東京都の認可を受けて設立し、今年で3年目に入りました。

ロシアは多くの人にとって、どこか遠い、縁の薄い国といったイメージが強いのではないでしょうか。そこで私たちは、ロシアの本当の姿を知りたい、ロシアの文化、芸術、教育、歴史を知りたい、そして何よりも、ロシアの人々と心が通う交流を深めていきたいとの思いから、「日本とロシア　お互いをもっと知ろうよ　日ロ創幸会」のキャッチフレーズのもと、さまざまな活動を展開して参りました。おかげさまで多くの皆様方から共感をいただき、大変喜ばしく思っております。

### 福祉施設にボリショイサーカスのチケットを贈呈

誕生して間もない私たち「日ロ創幸会」ですが、「ロシア文化フェスティバル in JAPAN」の諸行事、60 年近くにわたって日本での公演を続けている「ボリショイサーカス」等、さまざまな催しを皆様に紹介させていただいております

同サーカスについては、設立の年から3年連続で豊島区社会福祉協議会に、本年は杉並区社会福祉協議会、また「豊島区わんぱく相撲」大会にも入場券を寄付・贈呈させていただきました。昨年は、福島原発事故でいまだ避難を余儀なくされ豊島区内におられる方々から、「サーカスを観て心が安らぎました」、本年は、自閉症のお子様と一緒にサーカスを観賞されたご両親から、「ふだんは無表情の子どもがサーカスに感動していました」等の喜びの声を頂戴しました。今後もこの活動をさらに拡大して参りたいと思っております。

また、昨年末、駐日ロシア大使館の協力も得て開催した「日ロ料理交流会」には、日本・ロシア、さらにアゼルバイジャン（旧ロシア連邦のひとつ）からの留学生など 30 人ほどが参加。日ロ両国の料理に全員が舌鼓を打ちながら、楽しく友好を深め合う貴重な機会とすることができました。

### 毎年、ロシアに研修旅行

さて、私たちの活動の大きな柱が「ロシア研修旅行」。設立の年から毎年、JIC様のご協力を得て、ロシアの気候が一番よい夏に実施しています。現地に足を運び、その大地にみずからの身を置き、その歴史や文化・芸術、日常生活に触れるのがその目的です。首都モスクワとサンクトペテルブルクの2大都市を中心に、周辺にも足を延ばしながら、そこに暮らす人たちとも触れ合い、「お互いを　もっと知ろう」というわけです。

これまで3回実施し、訪れたのはモスクワの「クレムリン」「赤の広場」「トレチャコフ美術館」「モスクワ大学」、サンクトペテルブルクの「エルミタージュ美術館（冬の宮殿）」「エカテリーナ宮殿」「ペテルゴフ（夏の宮殿）」等々。参加者のだれもが「価値観が一変する」ほどの感動を体験し、「百聞は一見に如かず」の諺を改めて実感いたします。

江藤・代表理事

### ペテルブルグ訪問（第 1 回）

第1回研修会（2014年8月2日～8月9日）では、第二次世界大戦中、ソ連（当時）で最大の犠牲者を出したサンクトペテルブルク（当時はレニングラード）のピスカリョフ墓地公園を訪問しました。ここには、900 日もの長きにわたりナチス・ドイツ軍に包囲される中で 100 万人以上の死者を出し、そのうち約半分の一般市民、兵士が墓碑もないまま葬られています。『ターニャの日記』（包囲戦の渦中、少女ターニャがうち続く肉親の死を淡々と記録したもの）にその壮絶さの一部が伝えられていますが、戦争の悲惨さを目の当たりにし、参加者一同、二度と戦争を起こしてはならないとの思いを抱きながら献花するとともに、平和を強く祈りました。

### フィンランドからロシアへ（第 2 回）

昨年の第2回（7月 31 日～8月 8 日）では、フィンランドの首都ヘルシンキまでJAL便で行き、ヘルシンキから国際列車で国境を越えてロシアに入国。列車内での出国検査と入国検査という貴重な体験をさせていただきました。サンクトペ

**写真；（上）モスクワでのお点前、（中）タリンで箏の演奏、（下）日ロ交流盆踊り（ペテルブルグ）**

テルブルクでは、日本と交流のある「サンクトペテルブルク日露文化交流会」の青年と交換会をおこない、全員で盆踊りを踊って心を通わせ合うことができました。

**今年はエストニア（タリン）とモスクワへ**

本年の第3回（7月 31 日から8月８日）は、これまでよりさらに充実した内容となりました。ヘルシンキまでは昨年と同じですが、ヘルシンキから高速船でバルト海を横断し、対岸にあるエストニア共和国の首都タリンを訪問。参加者の中に、書道、お茶、お箏の教授・師範の方々がいらっしゃったので、タリン市ラスナマエ区の区庁舎の一角をお借りし、現地の皆

**和服美女、赤の広場に立つ！**

さんと文化交流会を開催させていただきました。聞けば、日本からこのような代表団を迎えるのは初めてとのことで、マリア区長を先頭に大歓迎を受け、参加者一同も感動。エストニアの伝統的な民族楽器の演奏のあと、お茶のお点前に合わせての箏演奏を披露させていただき、書道作品を贈呈。最後に全員で盆踊りを踊りながらの盛大な交流会となりました。

また、エストニアからは陸路による移動だったため、バスに乗ったままロシアに入国。前年の国際列車による国境越えに倍する緊張感を体験しました。

最終日には、モスクワに住む古くからの親友セルゲイ・フィル氏（エコテック・グループ GM）が交流会の場を設けてくれました。日本でいえば避暑地・軽井沢のようなところに招いてくださり、時間が経つのも忘れて盛り上がりました。モスクワ、サンクトペテルブルク、そしてエストニアのタリンと、行く先々で心の通い合う充実した研修会となりました。

今年は 22 人の参加者のうち男性が5人。箏や茶道具一式の運搬に多大な労働力を提供してくださいました。毎回そうですが、こうした皆さんが一参加者としてではなく、日ロ友好、日ロ創幸会の主体者との意識で献身的に行動してくださっていることで研修会の成功につながっていることに心から感謝しつつ、次回へと続けて参りたいと思っています。エストニア、サンクトペテルブルク、そしてモスクワでお会いした皆様、ボリショイ・スパシーバ！！

＊　＊　＊

3年目にして、「日ロ創幸会」のホームページも立ち上がります（11 月1日より）。

今後も会員の皆様ほかからのお声を頂戴しながら、ロシアの歴史、文化、芸術、スポーツ等の情報提供に力を入れ、人々との交流を通して相互理解の裾野を広げる活動を地道に展開して参ります。

## 【最新作】日本人監督が描くロシア SF 感動作

# 映画「レミニセンティア」

### 11 月 12 日より、渋谷ユーロスペースにてロードショー

### ハリウッドと日本で長編作品賞を受賞の話題作！

《ストーリー》

ロシアのとある街の郊外、小説家ミハエルは愛する娘ミラーニャと二人でひっそりと暮らしていた。彼のもとには悩める人々がやってくる。

「私の記憶を消してほしい」

ミハエルは人の記憶を消す特殊な能力を持っていた。小説のアイデアは彼らの記憶をもとに書かれたものだった。

そんなある日、ミハエルは娘との思い出の一部が無いことに気づく。過去が思い出せず苦しむミハエルは、教会で見たものすべてを記憶する超記憶症候群の女性マリアに出会う。彼女は忘れることができない病気に苦しんでいた。同時に、記憶を呼び起す特殊な能力を持っていた。

ミハエルはマリアに取引を持ちかける。

「君の記憶を消すかわりに、娘との記憶を取り戻してほしい」

彼女の能力によりミハエルは記憶の狭間へと落ちて行き、そこで衝撃の事実を知ることになる……。

《映画「レミニセンティア」について》

撮影場所はロシア、モスクワから約 300km 離れた古都ヤロスラブリ。「黄金の環」呼ばれる歴史的な建造物が立ち並ぶ街でありながら、旧ソ連時代は工業地帯だった街。映画に出てくる不思議な建物の一つは、宇宙記念館、世界で初めて女性で宇宙に行ったワレンチナ・ テレシコワの記念館。この建物は日本の映画で初めて撮影に使用された。

娘ミラーニャ以外の役者は実際にこの街に住む役者達。ヤロスラブリ劇場に所属し、ソ連時代から演技を学ぶ本格的な役者達がこの映画のテーマを感じ取り、協力してくれた。

忘れたくない記憶という父と娘のつながりを描き、そして、悩める人々の苦悩を描くことで、忘れられることができることも救いであるという記憶の二面性を描いている。哲学的なテーマでありながらも、良質のエンターテイメント作品に仕上がっている。

《映画祭の受賞》

今作は、ロサンゼルスシネマフェスティバル　オブ　ハリウッドで主演男優賞、監督賞、長編作品賞など主要部門を受賞。また日本では新人監督映画祭の長編グランプリを受賞。米国、日本の映画祭でグランプリを授賞という快挙を成し遂げた。

《キャスト》

出演：　アレクサンダー・ツィルコフ、井上美麗奈、ユリア・アサードバ、イリーナ・ツィルコバ、デニス・ヤコベンコ、アントン・フォミチョフ、イゴリ・ボンダレンコ、エヴゲニア・フォミチョーバ

脚本・監督：井上雅貴

製作：INOUE VISUAL DESIGN

2016/日本/カラー/16:9/STEREO/89 分

映画「レミニセンティア」

●公式サイト　http://www.remini-movie.com

●予告編

https://www.youtube.com/watch?v=bLBLknE8REE

この映画の国内宣伝拡大とロシア配給の支援を下記サイトでお願いしています。

https://motion-gallery.net/projects/reminiscentia

問合せ先；有限会社　INOUE VISUAL DESIGN

監督・宣伝　井上雅貴　inoue@i-vd.com

プロデューサー・宣伝　井上イリーナ　ira@i-vd.com

# 本の紹介

## ウラジオストク

### 日本人居留民の歴史 1860～1937年

著者;ゾーヤ・モルグン
翻訳;藤本 和貴夫
発行;東京堂出版
定価;3800 円＋税

日本に一番近いヨーロッパであるロシア極東の港町ウラジオストクが外国人に開放されてまもなく 25 年を迎える。この間、この地は東シベリアから輸出される石油・天然ガスのパイプラインの出口となり、世界の首脳が集まる APEC 首脳会議や東方経済フォーラムの舞台となった。

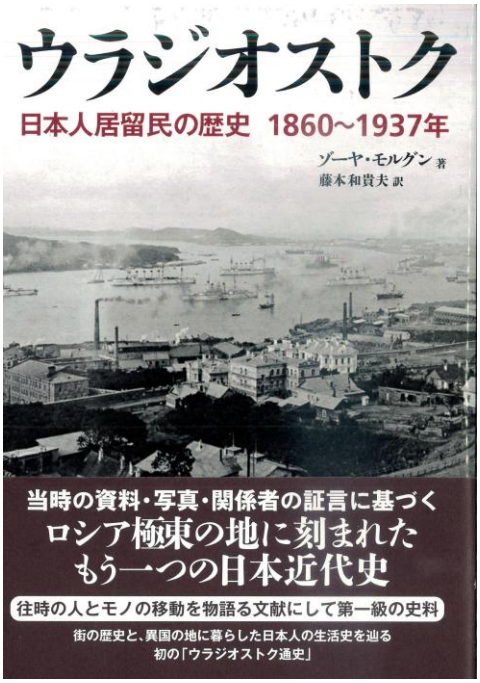
他方、かつてウラジオストクに住み、この街を浦潮や浦汐と呼んで親しんだ日本人やその子孫の人たちも、ここに居住した日本人の足跡をたどるため訪問するようになった。その結果、日露の双方で過去のさまざまな交流の記録や写真が発掘されている。

ゾーヤ・モルグン『ウラジオストク―日本居留民の歴史　1860～1937 年』（東京堂出版、2016）は、かつてウラジオストクに存在した日本人居留民社会の歴史を、日本とロシアの資料・写真・関係者の証言などを通して、初めて本格的に叙述したものである。筆者は、「日本語版刊行によせて」で、本書で「ウラジオストクと日本がいかに密接に結びついていたかということを示そうと試みた」と書いている。

ロシア極東のウラジオストクには、明治維新前から日本人が渡航し、第一次世界大戦の始まる頃には 5 千人を越える日本人の居留民社会が存在した。当初、ウラジオストクに渡ったのは長崎を中心とする九州の人々であった。幕末に開港した長崎には、ウラジオストクを母港とするロシアの軍艦が越冬し、稲佐には「ロシア村」ができていた。稲佐の若者にとってウラジオストクは遠い異国ともいえなかったのであろう。

本書は時代の順序に従った 3 部構成となっている。内容は次のとおりである。

第１部　ウラジオストクへの最初の日本人の出現から日露戦争の終結まで
第２部　ポーツマス条約から日本の軍事干渉終了まで（1905-1922）のウラジオストク日本人居留民
第３部　日ソ外交関係の樹立（1925 年）前後から 1937 年の全日本人引き揚までのウラジオストク日本人社会




さらに、解説（ウラジオストク小史）、参考資料（当時の地図や日本商店・企業名一覧）などが掲載されている。

19 世紀末、ウラジオストクでの日本人の商業活動・企業活動は他の追随をゆるさないものとなり、日本商店がロシア陸海軍の御用達商人の役割を果たした。雑貨卸から銀行業まで扱う杉浦商店、日本式公衆浴場から建設業、銀行業までを営む徳永商店など多くの日本商人が活動した。

日本人の活動や生活の支えとなったのが、浦潮斯徳居留民会と西本願寺が設立した浦潮本願寺であった。しかしこの日本人社会は、1917 年のロシア革命とそれに続く日本のシベリア出兵で動揺する。1922 年 10 月にシベリアに出兵した日本軍がすべて撤兵したため、多くの日本居留民はほぼすべての財産を失ってウラジオストクを後にした。

とはいえ、一部の居留民はウラジオストクに残った。本書は、社会主義時代のウラジオストクにも、数百人規模の日本人が住み、日本総領事館はもとより、日本人居留民会や浦潮本願寺が活動し、日本人による貿易が行われていたことを、そこで生活していた日本人たちを通じていきいきと描いている。スターリン時代の 1933-34 年のウラジオストクにも 131 人の日本人が住んでいた。最後までの残った日本企業は、運搬・海上輸送・貨物の保管管理を行う「商船組」であったが、1937 年に閉鎖された。この年、総領事館員を除くすべての日本人がウラジオストクを去った。ロシア極東の地に刻まれたもう一つの日本近代史の幕が閉じた。

本書には旧日本総領事館、浦潮本願寺、日本人商店の住所が書き込まれており、かつてのウラジオストク日本人街の散策マップとしても大いに利用できる。

第2回ロシア文化サロン

# ドストエフスキーの現代性と文学をめぐる日ロ問題

## 高野史緒さんが大阪ロシア領事館で講演

7月16日、『第二回ロシア文化サロン』が在大阪ロシア総領事館（オレグ・リャボフ総領事）の主催で開催された。講師は、2012年に「カラマーゾフの妹」で江戸川乱歩賞を受賞した作家の高野史緒さん。ヨーロッパを舞台とした歴史と芸術、音楽をテーマとするSF的小説（ファンタチカ）を得意とする高野さんだが、ロシアとかかわりのある作品も多く、今回の講演では「カラマーゾフの妹」を執筆するに至った経緯を中心に、ドストエフスキーの現代性と文学作品の翻訳出版をめぐる日ロの問題などが鋭く語られた。以下、講演内容を簡単に紹介する。

**「カラマーゾフの兄弟」に潜むミステリー**

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』は実は完結していない。続編として、13年後の物語をドストエフスキーは構想し、そこでは優しく天使のような三男のアリョーシャが皇帝暗殺に加わるという噂が流れていた。しかし、ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の出版後すぐ亡くなったため、続編の話は忘れ去られてしまった。

ドストエフスキーの小説は、登場人物の人格や言動、物語の描写において非常に整合性がとれている。しかし、『カラマーゾフの兄弟』には2つの矛盾点があることに気がついた。第一はスメルジャコフが二男のイワンにフョードル・カラマーゾフを殺したと告白する場面。彼は「フョードルが窓の外をのぞいたとき、後ろから撲殺した」と言うが、発見された死体は室内で仰向けに倒れていた。これはおかしい。第二は、フョードルの死体が発見された時、現場のドアは閉まっていたのに、召使たちが他の人を呼んできた時には、ドアは開いていたと書かれていること。これは、ドストエフスキーのミスとは考えられない。フョードルが死んだ時犯人はまだ中にいて、召使がもどって来るまでに外に出た。だからドアは開いていたのだ。

これは、後編につながる伏線として、意図的になされた記述に違いない。ここまで推理すると、もう自分で続編が書きたくてたまらなくなり、「カラマーゾフの妹」を執筆することになってしまった。

**ドストエフスキーの現代性**

これまでのロシア文学研究では、ドストエフスキーの作品を細かく分析し、その背景をなすロシアの宗教論、精神論について非常に多く語られてきた。しかし、彼の著作に見られる推理の部分や現代に通じる犯罪心理学などの部分に関しては全く議論されてこなかった。しかし、ドストエフスキーというのはもっと現代人の目で見ることのできる作家だと思う。

今から130年前の作家であるドストエフスキーは、現代の犯罪心理学の成果を完全に先取りしている。たとえば、スメルジャコフの人格だが、彼は明らかにサイコパスだ。サイコパスとは、罪の意識を完全に欠落させた社会的に不適格な犯罪者。スメルジャコフの生い立ちや、子供のころ小動物を虐待して殺してしまうエピソードなどは、サイコパスの特徴と一致する。そのミステリー性や現代犯罪心理学の成果を踏まえたかのような人物設定、こうした点にドストエフスキーの現代性が現れている。

**文学作品の翻訳出版をめぐる日ロ問題**

「カラマーゾフの妹」とその前に書いた「赤い星」（日本とロシアを舞台にしたファンタチカ／2008年）をロシアで出版しないかという話があったが、ロシア語での翻訳出版計画は結局うまく進まなかった。

日本の文学作品を外国で出版する時に、日本の国際交流基金が補助金を出す制度がある。経済的に豊かでなくても文化的水準の高い国はたくさんある。そういう国に日本の文学を紹介したい、でも翻訳出版するお金がないという場合、この補助金はとても有効だ。しかし、悪用する人もいる。他の国と同様に、ロシアでもこの制度を組織的に利用している出版社があるようで、レベルの低い翻訳者を低料金で使い、ひどい翻訳の本を出版して、補助金で儲けるビジネスが繁盛している。

文学作品の翻訳は非常に難しいもので、作品の内容とその社会的時代的背景をくみ取って、原文と同じような美しい言葉に再編成するには、大変な努力と修行が必要だ。村上春樹作品がロシアで大人気なのは、D・コワレーニンという優秀な翻訳者がいるからだ。彼は、通訳アルバイトで生活しながら村上作品の翻訳に熱意を注いでいる。しかし、そういう人はとても少なく、また優秀な翻訳者に十分な報酬を払ってしっかりした出版をするシステムが機能していない。結果、交流基金の補助金を悪用した粗悪な翻訳出版が横行する事態を招いている。

日本にもロシアにも素晴らしい文化があり、優秀な翻訳者がいながら、それが生かされない現実は、日ロ両国にとって大きな損失だ。「日本の文学はこんなにつまらないものか」とロシア人は誤解するだろうし、日本では逆に「この程度の翻訳しかできないロシアは文化レベルが低い」とネガティブキャンペーンにも利用されかねない。

外国の情報を正確に知ることは、それだけで大きな力になる。今ロシアで紹介されているのはアニメと漫画だが、それだけでは日本の一面しかわからない。文学は産業としては小さくてお金にはならないが、長期的に考えると、相手の文学や芸術を正確に知っていることは、国の情報力、文化力を高める上でとても大事だ。優秀な翻訳者を育成し、日ロの文化交流を是非強化してほしい。

## 【ロシア生活 不思議体験】

# 第 4 話「買い物」

白井　秀治（JIC 東京）

20 年前、僕はロシアに留学していた。

当時、学生に販売されていた定期券は、市内の公共交通機関ならばどこで何に乗っても一カ月定額というとても素晴らしいものだった。この定期を利用して、僕は授業が無い土曜日と日曜日にペテルブルグのメトロ全駅で下車するという、全くもって何の利益にもならない目標を掲げていた。

メトロの駅前にはキオスク以外にも個人の露店が所狭しと並んでいた（もちろん、今も並んでいるかもしれない…）。普通に生活している分には何も無いかのように通り過ぎることが多いが、留学が始まったばかりの僕には全てが真新しく、あらゆるものに興味が向いた。それもそのはず、東京の地下鉄の改札を通り地上に上がったところで、新聞も、野菜や果物も、鶏肉やひき肉も、地図をはじめ書籍も売られていることは考え難い。というよりも何かの販売が行われていること自体が想像できなかったからかもしれない。とにかく、駅前の露店をくまなく見るのが楽しかった。

いつものように定期券を使い『ペテルブルグ地下鉄途中下車の旅』を楽しみ数ヶ月が経った頃、プロレタールスカヤ駅の地上露店群を散策していた時だった。その中の一つに珍しいものを見つけた。折りたたみのテーブル上には様々なカードサイズの箱が並んでいた。僕はそれを「トランプ」だと直感した。
余暇を楽しむ遊び道具としてトランプは最高の発明品。「こんなにも色んなパッケージがあるなんて…」。東京でもこれだけの絵柄のトランプが一カ所で販売されているのを見たことがない。僕は心中、驚愕していた。恐らく、この驚きが顔に表出していたのではないだろうか。テーブルを挟んで折りたたみの椅子に座っている感じの良さそうな売り手のマダムが声を掛けてきた。
「こんなのもあるわよ」 テーブルの下にある在庫らしき箱から僕に手渡されたパッケージにはガルウイングドアの車、ジーンズ姿の若者と髪の毛がボサボサの老人が描かれたものだった。恐らくアジアのとある国から入荷したものだろうと反射的に思ってしまった。さらに色々と出してもらったが、どう見ても著作権を完全無視したバッタものにしか見えなかったので、「ありがとう。もう少し見ていても良いですか？」と僕はたどたどしくロシア語で言った。
並んでいるパッケージには流行りの映画、著名なミュージシャンやアメリカのポップスターが描かれているものが多かった。よく見るとスペルが違うものや、見覚えはあるが若干変更されているものなどが多数見受けられた…例えば、北欧のバンドで「a-ha」は知っているけど「a-ha-ha」という 3 人ユニットは知らない…という感じだ。

そんな数あるバッタもの（失礼！）の中から僕は一つの箱に目を留めた。
パッケージには全体にスペードの女王が描かれ、箱の右下にはプーシキンの横顔。しかもパッケージはラッピングされていた。
「Пушкин. Пиковая Дама！（プーシキン。スペードの女王！）」
僕はマダムに言った。
マダムはパッケージを指さして多くを話してくれたが、当時の僕のロシア語では何の話かチンプンカンプンだった。
僕はこのプーシキンの横顔とスペードの女王がパッケージの絵柄に採用されたトランプを即座に購入した。

遊ぶことに飢えていた僕には眩しすぎるほどの商品。さらに文化の中心ペテルブルグにて最高のトランプではないだろうか。これ自体をお土産にしても良いくらいだ。何と言う巡り合わせ。「ペテルブルグ地下鉄途中下車の旅」が実を結んだ瞬間とでもいうのだろうか。素敵な予感に溢れた。
そして、この日の途中下車の旅を打ち切り、そそくさと大学の寮に戻った。
自室に戻ってくると、一つ上の階に住んでいる日本語堪能で自称「大のジャムパン好き」アメリカンガール＝リーザがタイミングよく現れた。

「リーザ。凄いことが今日起きた！」 日本語で僕は彼女に言った。
「何が凄いの？」 もちろん彼女は日本語で応えた。
「トランプ買った！」 僕はトランプの箱を高々と掲げ彼女に見せた。
「すごーい！どこで見付けたの？」 いったん頬に当てた両手を大きく広げ彼女は歓喜を現した。
「プロレタールスカヤ駅の露店」
「どこそれ？なんでそんなところに行ったの？」

「いつもの途中下車の旅」
「日本人って無駄なことやるよね」
「日本人全員じゃないよ。僕だけかもしれない」
「それはそれで、折角だから DAI-HIN-MIN やろうよ！」
「ダイヒンミン！知ってるの？」
「知らない人いるの？」 僕に V サインを見せながら逆に訊いてきた。
「でも…二人じゃ…ね」
「そっか…じゃ、スピードは？」 彼女は言った。
「スピードも知ってるの！？すごいよリーザ！じゃ、日本のトランプゲームの後にアメリカのオリジナル的なトランプゲーム教えてよ」
「アメリカの？単純だけど難しいわよ」
「望むところ！じゃ、その前にビールを買いに行こう！」
「トランプに乾杯しなきゃね！」

寮の階段を駆け降りるアメリカ人と日本人。
どうしたものか二人とも母親からお小遣いを貰った子供のようにワクワクしていた。
部屋に戻るや早速ビールの栓を抜き乾杯した。
「今日は遅くまで遊んじゃうかもね」
「飲みまくり、遊びまくっちゃいましょ」
「ぱんぱかぱ～ん」ファンファーレと共に僕は丁寧にビニールラップされているパッケージを開けトランプを箱から出した。
「……ん？……」
「……ん？……」
リーザと僕はお互いの顔をマジマジと見てから、
再び 「……ん？……」
「なにこれ！！！」 頭を抱えリーザは発狂寸前の金切り声で叫んだ。
「全部スペードだ…」
「全部クイーン！！！」 彼女は髪の毛をむしり始めそうな勢いで言った。
「もう一度見よう」 落ち着いて僕は言った。
「裏表かもしれないし」 一瞬とりみだした彼女も冷静に言った。
間違えなかった。リーザも僕も 2 回ずつ確認を取った。
「全部スペード」
「全部クイーン」
「表裏同じ絵柄」
「色も形も同じ…。これって…どうやって遊ぶの？」 リーザは言った。
「分からない」 僕は言った。
「これってトランプ？」
「たぶん…」
「……」
「……」
どちらが言い出した訳でもなく僕らは無言でカードの数を数えだした。
間違いなく 52 枚プラス 1 枚で合計 53 枚だった。
「どうやって遊ぶ？」 僕は訊いた。
「分からない」 彼女は答えた。
「……」
「……」
ショックだった訳ではない。ただ僕たちは訳が分からなかった。

リーザは買ってきたビールを片っ端から飲み干し、無言で自室へ帰って行った。彼女に気の利いた一言が何も言えず、僕は彼女の後姿を目で追うことしかできなかった。
テーブルの上に置かれた「スペードの女王」の束をしばらく眺めてから、パッケージされていた箱の中に丁寧に戻した。深呼吸をしてお湯を沸かしインスタントコーヒーを入れ、僕はゆっくりと飲んだ。それから部屋の電気を消してベッドの上に仰向けになり両手を頭の後ろで組み天井を長い時間見つめた。
考え付いたことと言えば、『トランプを買った露店のあの愛想の良いマダムに返品＆クレームなんてできない』ということだけだった。
この一件以来リーザは僕とすれ違うとき、優しいけど悲しい微笑みを見せるようになり、僕の部屋には一人では現れなくなった。彼女とそれほど親しい訳でもなかったから特別悲しむことはなかったが、それでもやはり心の中にあいた小さな空洞を埋めるのに少し時間がかかった。一方で、「ペテルブルグ地下鉄途中下車の旅」は全駅を下車し完結させた。

寮の部屋を数回変わるうちトランプはいつの間にか僕の手元から見当たらなくなっていた。
出会いがあれば別れもある。僕は分かっているつもりだ。それでも何かが心の奥底で静かにその影を潜めていた。

あれから 20 年以上経つ。
今でもあのトランプの生産と販売はあるのだろうか。
そしてリーザは何をしているのだろう。
時々思い出す。

## ◇◆編集後記◆◇

▼今号では、ロシアの世界遺産・ソロヴェツキー諸島を、スタッフ旅行記を交えて紹介しました。▼12 月にはプーチン大統領が久しぶりに日本を訪問します。「北方領土」を含む日ロ平和条約交渉の進展をめざして、エネルギー開発、産業技術協力、観光交流など、あらゆる分野での日ロ交流の促進が図られようとしています。▼長年の懸案が解決に向かい、日ロ関係のこれまでにない好循環が実現することを願わずにはおれません。（F）